

社会的養護の新展開 1

— 社会的養護を終えた若者の自己表現から —

浦田 雅夫

京都造形芸術大学

昨年の11月、京都木屋町にあるModern Timesで、映画「チョコレートケーキと法隆寺」の上映、同映画監督である向井啓太さんと、シンガーソングライター中西健さんのトークショーを見た。「チョコレートケーキと法隆寺」は、前から見たいと思っていただけになかなか見る機会を逸していたので好機だった。それに、チョコレートケーキとコーヒーも付いてくるというのにひかれたが、何よりもこのチョコレートのおいしさにまた驚いた。しかし、そのおいしかったチョコレートとは裏腹に、上映後すぐに、そうか、「チョコレートケーキ」は、向井さんにとって嫌な思い出、不味い思い出だったのかと、その意味を知る。

施設では毎月誰かの誕生日が開かれる。その時、決まって不味いチョコレートケーキが出ていたのだという。施設の仲間より一足先に小学校卒業を機に児童養護施設を退所した向井さん。「サバイバーズ・ギルト」というと大げさに聞こえるかもしれないが、ある種の罪悪感を抱えながら、施設を後にしたものの「希望の楽園」はそこ（家庭）にはなく、苦労されてきた軌跡が感じられる。施設・小学校時代の仲間との生活、親、そして自分自身と向き合う素晴らしい作品

だった。そして、何よりも、そのあとの中西健さんとのトークもよかった。向井さん同様、中西さんも児童養護施設で生活してきた当事者で、作歌兼歌手として自己表現を続けておられる。私はまるで太陽（中西さん）と月（向井さん）のような雰囲気醸し出すふたりに共感して、すぐに、次のメヌエット（施設退所後のアフターケア支援団体）のイベントに参加していただけないだろうかと思った。そして、ついに、今年の1月にそれは実現した。

1月のイベントでは、メヌエットを利用して浦上さん（写真：マイクをもつ手前の方）も参加してのトークが実現。



向井さんの作品は、見る人によっては「施設での生活ってひどいな」と感じ、「なんだこの施設批判の映画は！」と怒り出す人がいるのではないかと思う場面もある。浦上さんは映画を見た感想を「僕のいた施設は、すごい恵まれていたんやなと思いました。」と語った。

単純に社会的養護の「退所児童」といっても、現在の年齢、入所していた理由、在籍期間、現在の家族との関係など、それぞれの個別性が相当にある。いつの時代でも施設間を超えて、「施設のあるある」は一定確かにあるが、「そうだったの」「うちと全然違う」ということがいっそう多くなったきがする。特に、この10年ほどの間に施設ではケア単位の小規模化はどんどん進み、職員配置基準や施設内虐待の禁止などの法定化により生活形態やケアのなかが大きく変化してきている。



リハーサル中の中西健さん

「証」

限られた時の中で 何ができるだろう
限られたこの体で 何が守れるだろう

誰でも不平等に生まれてきて
不平等に育てられて
それぞれの道をゆく
小さな小さな愛に気付き
大きな大きな勇気が変わる
咲いた花決して枯らさぬように
いつまでも燃やすこの命

(歌詞の一部を本人の了解のもと掲載)

社会的養護とは、保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護するとともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うこととされ、これまで児童養護施設などでの施設養護がその中心を担ってきた。しかし、近年、国は里親やファミリーホームなどでの養育へと大きくシフトチェンジを図っている。今後はこういった動向や、社会的養護を終えた若者たちについて発信していきたい。



「チョコレートケーキと法隆寺」(監督: 向井啓太、制作: 慶応義塾大学 藤田修平研究室 / 59分 / カラー)

学校臨床の新展開をひとまず終え、社会的養護の新展開へ つづく